

## 巻頭言

弘前大学国史研究会会長 長谷川 成一

弘前大学国史研究会が、昭和三十一年に機関誌『弘前大学國史研究』の創刊号を発刊してから、本年をもって三十年を迎えた。また『弘前大学國史研究』は本号の刊行をもって八十号を数えることになった。本号を創刊三十周年・第八十記念号と表記したのは、右に述べた経緯があったことによる。

本号の巻末に弘前大学国史研究会三十年の歩みとして、本研究会の簡単な年譜を付したが、その歩みが必ずしも順調なものでなかったことは、一読されればお分りいただけることと思う。そもそも『弘前大学國史研究』の発刊は、創刊号に掲載された創刊の辞の言を借りれば、「広く国史学界に寄与する」こと、「当地方における正統国史学の基礎を置かんとする」の、二つの目標ないし理想を掲げたものであったし、その精神に基づいて本研究会は出発した。当時における研究条件ならびに出版事情の劣悪さなど、今からでは到底想像もできないようななかで、我々の先輩達が奮闘されて来たことに思いをいたせば、真に恵まれ過ぎるほどの環境にありながら、現時点に至る我々の活動は創立当時の理想にいかほど接近しえたのか、はなはだ心許ない気持ちにするのは私一人だけではないと推察する。

昭和五十五年に刊行した第七十記念号においては、古くから本研究会と関係の深い先生方に御原稿の執筆を依頼して、今後の我々が進むべき方向の指針を示していただいた。その御芳志に対しては、改めて御礼申しあげる次第である。このたびの第八十号に関しては、是非、我々会員の力でより充実した内容の研究を世に問うべきであるという意見が強く、またそのように努力してこそ、前回の第七十記念号にご執筆いただいた先生方のご恩に報いることにもなるのではないか、加えて、本研究会の現時点における姿勢を世に問うことになるのではないかと考えた。その意味からも本号に掲載した各研究が、今後における本研究会の活動の一つの基礎となることを期待している。

我々は三十年という時間の重さを噛みしめ、しかも創立の時点における初心にかえて斯学の発展にいさかなりとも寄与できるよう、一層の努力を積重ねていく所存である。また三十年以前に、『弘前大学國史研究』を世に送出した先輩達の創立の精神をここで改めて確認して、その歩を伸ばしてゆきたいと思う。同学諸賢の厳しい御批判と御支援を伏してお願ひする次第である。

昭和六十一年三月